機関リポジトリは図書館員の夢を実現する

竹内比呂也

多くの図書館員が夢見たこと。それは、世界中の文献についての記録をもれなく作成し、それを検索の手段となるように整備し、文献を必要とする人に対して、求められたときに遅滞なく提供することである。

「世界書誌」の編纂を計画したオトレやラ・フォンテーヌといった先駆者たちの挫折以降、到底実現不可能と思われたこの夢に対して、「ひょっとしたら実現できるかもしれない」という一縷の望みをもたらしたのは、インターネットである。しかし、インターネット自体はいわば水道管にすぎず、それを本当に人々の役に立つものにするためには、そこに流れる安全な水、すなわち信頼できるコンテンツの供給が必要である。日本をはじめとする先進諸国では商業ベースで大量のコンテンツが供給され、また個人が容易に情報発信できる環境が整った。その結果、情報洪水と呼ばれるような量的問題が生じたのみならず、手に入れた情報が信頼に足るものかどうかを判断する能力がなければ危うい状況が出来している。

一方発展途上国でも、政府開発援助などで情報通信基盤の整備が進み、大学や研究機関等でのインターネットアクセスは可能になった。それによって無料のコンテンツが大量に流入したものの、学術論文のような信頼に足るコンテンツについては、依然として経済的な力が利用可能性を左右し続けている。また、インターネット上に発信されるコンテンツはほとんどが先進諸国でつくられたものであり、多くの途上国からの発信は未だ十分とは言えない。

機関リポジトリは、インターネット上において学術的研究成果を自由に流通させる手段の一つとして推進されてきたものである。これは、誰もがアクセスできるコンテンツを、大学等の機関が責任を持って発信するための基盤であり、同時に、従来の出版とは比べ物にならない簡便さで世界的な流通を可能にするものである。すなわち、経済的理由によってアクセスできなかったコンテンツを利用可能にするための手段であり、これまで存在すら知られなかった途上国のローカルな研究成果やデータ等へのアクセスを可能にする手段とも言える。世界中のあらゆる機関が、独自にあるいは共同で機関リポジトリを持つことにより、情報の利用可能性は飛躍的に高まり、誰もが自由にアクセスできるようになるのである。

機関リポジトリこそ、グローバルな意味での知識の普及と共有化を進め、これまで絶望的とも言えた情報アクセス環境と発信力の南北格差の縮小をもたらすものになるのではないだろうか。このような南北格差の解消こそ、現代的な意味で図書館員の夢の実現に向けた大きな一歩になると考えている。

（たけうち　ひろや／千葉大学文学部教授）